

氏 名 (本 籍)	こ 洪	けん 顕	きち 吉 (韓 国)
学 位 の 種 類	教	育	学 博 士
学 位 記 番 号	博	乙	第 464 号
学位授与年月日	昭和63年 7 月 31 日		
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当		
審 査 研 究 科	教 育 学 研 究 科		
学 位 論 文 題 目	道德教育基礎論への一試論 —— 人間科学の成果に基づく道德教育理論の再構想をめざして ——		
主 査	筑波大学教授		佐 藤 三 郎
副 査	筑波大学教授		遠 藤 昭 彦
副 査	筑波大学教授	教育学博士	高 野 恒 雄
副 査	筑波大学教授	教育学博士	加 藤 隆 勝
副 査	筑波大学教授	教育学博士	片 岡 暁 夫
副 査	筑波大学教授		石 部 元 雄

## 論 文 の 要 旨

### 1) 研究の意図と方法

科学技術の進歩は、生活の豊かさと共に、核爆発の脅威や自然生態系の破壊等、人類に様々な生存の危機を招来した。この危機的状況が生起した原因は、しかし科学技術そのものにあるのではなく、それを創り出し、利用する人間主体のあり方にこそある。ここに、この危機的状況に対処する新しい道德観の確立と、それに基づく道德教育のあり方が強く求められるところとなる。

本論文は、このような問題意識に立ち、人間関係や社会の問題に視野を限定する従来の道德観では自ずから限界があるとの観点から、人間の生存を自然生態系のなかで見直そうとする。そして、人間はその自然性において「自然」と生存の原理を共有するという見解に立つところの、エソロジー (ethology) と分子生物学 (molecular biology) の学問的成果に学びながら、まず道德概念の人間科学的な基礎づけを行っている。次いで、道德の主體的・意志的側面について、哲学・倫理学の諸成果に学びながら、道德概念の内容の構築を図ろうとする。そしてさらに、この立論を基盤に、人類生存の危機を克服しうる道德性と道德的思考の構造を究明し、その道德教育の実践的可能性の展望を試みようとする。

以上の研究を進めるために、エソロジーと分子生物学に関する諸文献と、哲学・倫理学及び道德教育に関する諸文献を主要資料として用い、科学と哲学の両面からの学際的な接近を試みながら、

これを人間学的次元に統合して、課題の解明に迫っている。

## 2) 本論文の概要

本論文は3部9章から成っている。本文は209ページ、註釈および参考文献は24ページに及び、計233ページ（1ページ当たり1190字で、400字詰め原稿用紙に換算すると総計約690枚）である。

第一部はエソロジーと分子生物学の成果を基礎にして、人間の本性の把握を試みている。〈第一章〉では、エソロジーと分子生物学による人間把握を、従来の生氣説と機械説との比較において論じ、その有機体的、目的論的見解を明らかにした。〈第二・三章〉では、この人間把握は、人間の本性がDNAにプログラムされた生得的行動の全体性にあり、情緒的強化機構、学習規則、フィードバック系という三つの機構から構成されているとしている点にその特質があることを指摘し、このフィードバック系の統合的働きは、人間の本性を一層よい方向に向かわせる「自然的性向」を有していることを明らかにした。このような人間把握に立ち、人間はすべての生命体と同様にDNAによって構成されているから、人間は地球上における生命共同体のひとつの生命体として、全地球的・人類的次元で把握する必要性があることを、科学的根拠を明らかにしつつ基礎づけた。

第二部においては、以上の人間把握を基盤にした道德観に立って、道德性の内容と道德的思考の構造を追求した。〈第四・五章〉では、人間の本性には道德を守ろうとする道德性があるというエソロジーおよび分子生物学の道德観を、従来の倫理学説にみる道德観とかかわらせて批判的に吟味し、その不十分さを指摘する。〈第六章〉では、この問題点を人間学的観点から克服しようと試み、DNA理論が長時間にわたる自然環境の影響を重視している点と和辻哲郎博士の風土論との一致に着目し、氏の風土論を手がかりとして、その静態的考察とは異なる動態的考察を行っている。ここで氏の四つの類型を、四つの中心的鍵刺激（モンスーンの「豊かさ」、砂漠の「恐しさ」、牧場地域の「規則正しさ」、全ての地域に見られる「美しさ」として把握し直す必要性と、この四つの鍵刺激に対応し、その錠として、「思いやり」、「団結」、「合理性」、「審美」という四つの道德的思考が人間において触発されること、とを明らかにした。

第三部では、科学文明の問題点を克服しうる道德的思考の構造を追求し、道德教育のあり方の方法的可能性を考察している。まず、〈第七・八章〉では、ローレンツ（Konrad Lorenz）の分析する人間本性の破壊現象に関連させて、メタ倫理学の見解を援用しつつ、人間の生存を目的とした人類的視点から四つの道德的思考の構造を検討し、そこから、原初的かつ基本的である「思いやり」中心の道德的思考の構造がもつ優位性を導き出した。〈第九章〉では、思いやり中心の道德的思考の構造を道德教育の中にとり入れ、これを子どもの中に形成するためのひとつの方法的可能性を、道德資料の活用に具体例を求めて検討している。子どもの直接経験の資料には、子どもの未発達な思いやり中心の道德的な思考構造が含まれているとする仮説に基づいて、具体的資料に即して分析・立証し、この種の資料を用いて思いやり中心の道德的思考の構造を分析しつつ、その能力を形成することが可能となることを明らかにした。

## 審 査 の 要 旨

今日のような科学技術の時代における人間への基本的要請は、急速に進歩する科学技術を人間の幸福と平和に役立て、これに適った道德観を一人ひとりの人間が身につけることであり、従って、このことを可能にする道德教育理論の構想が必須の課題となる。

本論文は、人間関係のあり方に限定した従来の道德観や特定の価値観に基づく道德教育では自ずから限界があると考え、人間を自然生態系に属する生命体と考える全地球的観点に立つ道德観を基礎に、前記の課題に応えるに足る道德教育理論を構想しようとしている。すなわち、人間を「自然」と共存する生命体であるとするエソロジー・分子生物学の学問的立場とその成果に基づきながら、道德教育の基礎概念としての道德概念をとらえ直し、その概念の内容的究明を通して、課題に応える道德教育の実践方法への展望を拓こうとしている。

このような意図をもつ本論文は、次の点で評価できる。すなわち、エソロジー・分子生物学の成果に関する基本的把握に努めて、その代表的な主要文献を精密・詳細に考察すると共に、人間本性のメカニズムについて科学的把握を行ない、道德及び道德性に関する科学的な成立根拠と普遍妥当性の根拠とを確立したこと、また、エソロジー・分子生物学の道德性の把握の内容的問題点を、風土論を手がかりとしながら動態論的に考察し、原初的・基本的な道德的思考の構造を確定し、道德教育理論を基礎づける中心的概念を導き出したこと、さらに、人類が直面している今日の危機を克服する道德教育の処方箋として、思いやり中心の道德的思考育成の可能性を、道德資料の活用という具体的方法の次元で明らかにしたこと、である。これらの論点は、従来の道德教育研究に見られない新たな知見を、道德教育論に加えるものであり、その学際的な研究方法と共に、これからの道德教育の理論的研究にとって重要な礎石となるものとして高く評価できる。

しかし、道德教育理論の科学的基礎づけという意図のゆえに、エソロジー・分子生物学における最新の成果を追い求めることに専念するあまり、これらの学問的成果が示す人間の本性と道德性や道德的思考との関係、また風土論との関係などについての考察が手薄になったことは否めない。今後、これらの点については引き続き十分な研究・考察を行ない、道德教育基礎論としての理論的整合性を追求することが望まれる。

よって、著者は教育学博士の学位を受けるに十分な資格があるものと認定する。